



花かご便り 2021年2月号

作品出展者(掲載順)

【俳句】 ドンゴン巳器乃、ツルー玲子、星きみえ

【エッセイ】 武井よしこ、中山まり子



【俳句】

 **ドンゴン巳器乃(みきの)**

豆まきや いつまで続く 鬼は外 (選)

予防接種等いつまでいつまでしたら、鬼(コロナ)がなくなるのかしら？

雨上がり 土の匂いに 梅の花

雨上がりに裏庭に出てみると、土がしっとり梅の花がほころびはじめていました。



ツル—玲子

雨明けて 赤く輝く 南天や

毎朝散歩するとき、大きな南天の木に赤い実がたわわに実っているのを見ているが、雨の後、赤い実が特に輝いているのに、一瞬目を奪われた。

ワクチンや 友も受けられ 安堵なり

ワクチンをいつ接種できるのか、あちこち問い合わせ、やっと第1回目を受けられた。親しい友達も皆前後して受けられたので、まずは一安心。

枯れ木から 命吹き出す 木蓮や

近所の木蓮の木は冬の間すっかり枯れ木になっていたが、急にピンクや白い花が咲き出し、それまで眠っていた命が一斉に生き返ってきたのに心を打たれた。

青空に 向かって開く 梅の花 (選)

まだ寒いと思っていたが、近所の梅の木や、桜の木のツボミが開き始めてもう春がきたことを知らせてくれた。





星きみえ

うすやみ

薄闇を黒きマスクの黒き肌

季語：マスク(冬)

夕方ベイの遊歩道を歩いていたら、向こうから背の高い人が2人来るのを見かけた。2人とも黒いマスクをつけ、黒い服を着て、おまけに肌まで浅黒く、ちょっとギクッとさせられた。実際はカッコイイ若い男の人達だったのだが、夕闇の中での遭遇は、小心者の私をビビらせるのに十分な効果があった。今このコロナ騒ぎの中、「ちょっとミステリアスな気持を表現できたらいいな」と思って詠んだ一句。

かるがも

軽鴨や扇のごとき片つばさ (選)

季語：軽鴨(冬)

いつも見る、割と地味な色合いの鴨達が、今日もいつもの場所に集まっている。いつもいるし、色も地味だし、見飽きた感じの鴨達である。でも、今日はその中の1羽が羽繕いをしていて片方の翼を広げている。たくさんいる鴨達だが、片翼を広げているのを見たのは初めてで、その片方だけの翼が朝の光の中でハッとするほど美しかった。

はるどなり

春隣モーツアルトのピアノ曲

季語：春隣(晩冬)

「もう春です」と言っても誰も文句はないようなよく晴れた日の午後、モーツアルトのピアノ曲をイヤフォンで聞きながら散歩した。モーツアルトは春にはぴったりですね～！



【エッセイ】



「お気に入りの映画」

武井よし子

何年か前 Facebook に加入する際の質問に、名前や住所の他に趣味として、＜1番好きな映画は＞という質問があって、私は＜東京物語＞を書き込んだ。その後 Facebook は全く書き込みをしなくなったが、好きな映画と聞かれて素早く＜東京物語＞を思い出した自分を褒めてやりたい。

私が初めてこの映画を見たのは、忘れもしない 1970 年代。初めてのインド旅行から帰国して、さてこれからどうしようと自分の進退に迷っていた頃だ。それまで、＜東京物語＞の監督、小津安二郎の名前は知っていたが、多分映画館で映画を見たのはその時が初めてだったと思う。

誘ってくれた友人は絵描きで、一時地方紙で映画の評論記事など書いていた。私は彼女の映画評論をかっていた。彼女は「きっと泣くからハンカチを用意しなくちゃ」などというので、私は悲哀物語で観客を泣かす映画かと思っていたが、そんな姑息なものではなかった。

制作は 1953 年。俳優は原節子、笠智衆、杉村春子、東山千栄子、山村聰など、当時の錚々たるメンバーである。

ストーリーは、尾道に住む老夫婦が東京で暮らす 3 人の子供たちに会いに行くという始まりの前半。後半は、東京からの帰途母親が倒れ、大阪の 3 番目の息子の家で泊まったりして、結局尾道の自宅で他界する。葬式に今度は東京から 3 人の子供たちと大阪にいる息子が尾道に帰ってくる。しかし夫婦が東京を訪れた時のように、子供たちはそれぞれ

の生活に忙しく、残された父親（笠智衆）のことはあまり構わない。ただ1人、嫁（原節子）だけは東京にいた時も尾道でも、誠意を込めて義父をいたわる。葬式の朝早く、大阪から末息子が来たことを知らせに海岸に立つ義父を呼びに行く。義父は海辺に1人立っていた。その時言う笠智衆のセリフがいい。「綺麗な、朝焼けだった。今日も暑くなるぞ」。奥さんに死なれて、悲しいとか、寂しいとか一切、言わない。

しばらくして、子供たちは現在の自分の生活や家族のために、慌ただしく帰ってゆく。1人最後まで残ったのは、血のつながらない嫁の原節子なのだが、やはり帰ってゆく。後に残った笠智衆に、隣人が顔を出して「お寂しになりましたねー」と声をかけると、「気の利かん奴でしたが、（奥さんのこと）いなくなってみると1日が長いですわー」と言う。このセリフが唯一彼の悲しいという表現だった。昭和初期の尾道という地方都市の日本家屋が、懐かしく美しく映っている。下駄の音なども時々聞こえる。

今回改めて見直したら、前回見逃していたのか、それとも私が歳をとったせいかな、新しい発見があった。

東京で祖母が、長男の子供（5歳くらい？）を遊ばせている時、1人呟くシーンがある。「アンタ、大きくなったら何になる？やっぱりお父さんのように医者になんの？おばあちゃんはその時まで、生きておらんじゃろーね」。そして、実際その数週間後に亡くなるのだ。それが第1の発見。孫の存在は残酷なものだが、冷静に自分の人生の位置を気付かせてくれる。

第2の発見は、さすがにテンポが鈍く感じた。70年近く前に作られたのだ。仕方ないのかもしれないが、でも相変わらず感動した。

やっぱり、泣いた。





「私の趣味」

中山まり子

「趣味は何ですか」と聞かれると答えに困る。えーと、あれかな。いや、あれでもない、これかな。これでもない。私の趣味は一体何だろう。

本を読むのは好きだが、昔のように手当たりしだい読まなくなった。読書が趣味とはもう言えない。目が疲れるせいもあるが、最近には自分に興味のある本しか読まない。年をとって、その傾向はますます強くなってきた。こういうのは苦手、などいって、自分の好きなものばかり読んでいては世界が狭くなるのはわかっているが、つまらない本を読むのは人生の無駄遣いをしているようでならない。

映画ファンは多い。映画が趣味、映画なら何でも楽しめる、1日に何本も見る、という人もいて、羨ましい。私とえば、これも本と同様、自分が感動するのしか見たくない。当然、そんな映画の数は限られている。しかし、これも、ある時決めたのだ、自分が面白いと思わないものは見ないと。以後、ビデオなど観ていても、つまらなければ途中でパッと消してしまう。主義主張をもつのは気持ちがいいが、気をつけなければ、自己中心で鼻持ちならぬ頑固ババアになってしまいそうだ。いや、もうすでにそうなっているかもしれない。

ピアノを弾くのが趣味なんていいなと思う。実は私は60半ばからピアノを始めた。当然ながら、なかなか上達しない。何度もやめかけたが、また最近、自己流に練習をし始めた。70年代のフォークをポロンポロンと弾いて楽しんでいる。こう書きながら、自分のピアノ練習風景が浮かんでくる。それはあたかも、暗礁に乗り上げ沈没寸前の貨物船のようだ。ピアノが趣味の人にはとても見えない。

ガーデニングというのもある。庭仕事に、いつ頃からこんな洒落た呼び名がつくようになったのだろう。郊外に建てるマイホームの夢を人々が見始めた頃だろうか。いずれに

せよ、土仕事はそう優雅なものではない。植物は人間の思うようには成長してくれない。水をやりすぎれば枯れ、やらなくても枯れる。ほっておけば、庭中、草だらけ。木など、小さい時は早く大きくなれと肥料をあげたりしたのに、いつの間にか、自分の背丈を越え成長し、あつというまに枝をはりめぐらし、天をつくような高さになり、気づいた時は、まわり近所の‘問題児’になって家主を悩ませる。実際のガーデニングはNHKの「趣味の園芸」のような訳にはいかない。

料理はよくやる。しかし、好きな時だけ作るのであれば楽しいかもしれないが、毎日のこととなれば、話は違う。趣味は料理です、と言う主婦にかつて会ったことがない。そう言う男性は時々いるが。

趣味の極め付きと言えれば旅行だろう。日常と違う場所に行き、違う景色を見、違う文化に触れ、珍しいものや美味しいものを食べるのは確かに楽しい。徹夜の荷造りや、空港までの車の渋滞、長い列や待ち時間、窮屈で死ぬほど長い飛行機の旅であったとしても。しかし、私は40年近く旅行業をやってきた。旅行の手配をするだけでなく、日本中訪ね歩き、ツアーを作る仕事をしてきた。リタイアしたら、仕事でなくのんびりと自分が楽しむ旅行をしたいと思っていたが、今や世の中はコロナ騒ぎで、それどころではない。

結局、私に残るのは散歩くらいしかない。なんとも無芸な趣味だが、カラリと晴れたカリフォルニアの空の下を花木をめでながら歩くのは無上に楽しい。ユーチューブで好きな番組を聴きながらであれば尚更のこと。「ご趣味は？」と聞かれたら、胸をはって「散歩です」と答えることにしよう。

~END~

